

# 縄文後期市来式土器出土遺跡の分布と当遺跡の出土土器から推知する縄文農耕特に南九州における稲作農耕の起源について

諏訪 昭千代\*

Distribution of the sites from which Ichiki-type pottery of the late Jomon period was excavated. The origin of Jomon agriculture, in particular, rice agriculture in Southern kyushu, inferred from the pottery.

Akichiyo Suwa

## I. はじめに

南九州縄文後期の指標のひとつとされている市来式土器<sup>1</sup>の出土遺跡の分布を後に示した図で見ると、これまで示されたような見方<sup>2</sup>を以ってしては、市来式土器が用いられた当時の社会や文化の在り方を推知することは極めて難しいように思うのである。それで、本稿では従来の考え方から多少なりとも離れて検討したいと考えている。

本稿は最初に、本県で市来式土器の出土が知られている遺跡の分布状況を概観し、次いで後の分布図から読取った市来式土器出土遺跡の所在地に相通ずる地形・地質などの自然環境を述べる。第3は市来式出土遺跡が特に群在している地域の遺跡相互の距離、第4は市来式土器出土遺跡に見る縄文後・晩期を主とする出土土器について述べる。第5は、これまでの第1～4から導かれると考える縄文農耕、特に後期の稲作問題に触れる。そして最後が全体を括ることになる。

なお本稿は、取上げた主題と共に、当然各項も主題に沿うものであるから、全体的に冗長の嫌いは免れないことをお断りしておきたい。

## II. 本県における市来式土器出土遺跡の分布概況

鹿児島県で市来式土器が出土している遺跡（表1）の広がり<sup>1</sup>を示した分布図（図1）によって遺跡の所在地から海岸までの距離を参考にして仕分けると、㉗今日の海岸から1 km以内の直近にあるもの、㉘海岸から概ね1～5 kmのところ<sup>2</sup>に位置するもの、㉙海岸から5 km以上離れたところにあるものなどさまざまである。いま上に示した㉗～㉙に従って、県内の市来式土器出土遺跡を地域ごとに検分することとしたい。

まず、東西と南の三面が海に接している薩摩半島は、草野貝塚（6）・大渡遺跡（11）などのように鹿児島湾岸沿いにあるもの、竹原遺跡（39）・下園遺跡（18）のように南岸近くにあるもの、南原A遺跡（49）・上畑田貝塚（50）のように西岸砂丘の内側にあるものなどがある。そして、これらの遺跡の大方は先に述べたように、今日の海岸線の近くに所在するか海岸から遠いものでも5 km以内のところ<sup>2</sup>に位置する。また内陸に所在するものでは、八反田遺跡（43）・田中堀遺跡（44）・黒川洞穴遺跡（46）など3例があって、何れも海岸線から6～8 kmを隔てたところに所在する。

\*〒892：鹿児島市城山町1-1 鹿児島県立博物館

表1 市来式土器出土遺跡地名及び所在地

番号	遺跡名	市町村	所在地	備考
1	上之原	鹿児島市	山田町上の原	
2	大龍	〃	大龍町11-44	
3	春日	〃	春日町5番	
4	木ヶ暮	〃	田上町木ヶ墓	
5	石郷	〃	吉野町石郷	
6	草野	〃	下福元町草野賀呂	
7	平川海の上	〃	平川海の上	
8	光山	〃	下福元町坂之上光山	
9	若宮神社	〃	池之上町若宮神社	
10	五位野	〃	五位野五位野小学校下	
11	大渡	指宿市	十二町大渡	
12	渡瀬	〃	西方渡瀬	
13	中川	〃	西方中川バス停留所前	
14	大山崎	〃	十二町大山崎(観光ホテル敷地)	
15	橋牟礼川	〃	十二町下里	
16	小江平枕崎	西鹿籠	小江平下渡川流域及び河底	
17	木浦	〃	西鹿籠木浦(木浦義雄宅地)	
18	下園	〃	東鹿籠下園	
19	尾賀台貝塚	川内市	隈之城町尾賀	
20	石間伏貝塚	〃	隈之城町石間伏	
21	寄田	〃	寄田町沖園	
22	出水貝塚	出水市	上知識尾崎	
23	大野原	垂水市	大野部落西南路上	
24	深港	〃	牛根深港	
25	柘原	〃	柘原小学校及び柘原西部五反	
26	本坊	鹿屋	南町本坊六ノ里	
27	中ノ原	〃	中名中ノ原	
28	浅川牧	西之表市	現和浅川牧	
29	納曾	〃	西之表9939	
30	寺ノ門	〃	国上寺ノ門	
31	大田	〃	国上大田赤木嵐	
32	武貝塚	桜島町	武榎川350	
33	鍋尾	喜入町	中名鍋尾	

番号	遺跡名	市町村	所在地	備考
34	帖地(迫ノ尻)	喜入町	生見帖地迫ノ尻6575	
35	ドノウエ	〃	中名清水上方	
36	前ノ浜	〃	前ノ浜	
37	田中	開聞町	上仙田瓦ヶ尾1814	
38	仙田	〃	上仙田瓦ヶ尾	
39	竹原	穎娃町	郡竹原	
40	上ムネ塚の園	大浦町	塚の園	
41	柿ノ園	〃	柿ノ園永田	
42	丸木浜	坊津町	泊丸木浜	
43	八反田	知覧町	郡八反田	
44	田中堀	川辺町	上山田田中堀	
45	川上貝塚	市来町	川上中組	
46	黒川洞穴	吹上町	吹上町坊野	
47	大園原	〃	小野大園原	
48	白寿窟	〃	中之里	
49	南原 A	金峰町	大野南原1383	
50	上焼田貝塚	〃	宮崎	
51	山下	入来町	浦之名山下般者	
52	時吉瀬ノ上	宮之城町	時吉	
53	園田	〃	六畝町園田	
54	轟原瀬ノ上	〃	虎居	
55	江内貝塚	高尾野町	江内外畑763-1	
56	鍋倉洞穴	始良町	帖佐鍋谷	
57	諏訪岡	栗野町	田木場諏訪岡	
58	赤子	牧園町	三体堂小字赤子	
59	春花田	隼人町	野久義田春花田	
60	福山高校	福山町	福山2967	
61	向段	大隅町	大谷向段	
62	八合原	〃	岩川八合原	
63	徳光ヶ丘	輝北町	下百引東原別府	
64	高岡口第Ⅱ	末吉町	南之郷10490	
65	大路	〃	南之郷大路	
66	三枝第Ⅰ	〃	南之郷三枝	
67	新高松	〃	南之郷二之方新高松	

番号	遺跡名	市町村	所在地	備考
68	垂門 A	松山町	新橋垂門54	
69	堀之内	〃	泰野堀之内	
70	樽野	志布志	内之倉字樽野555	
71	堂ノ下	〃	帖字堂ノ下	
72	家野	〃	帖字松崎	
73	松崎	〃	帖字松崎	
74	柳ノ下	〃	帖字柳ノ下	
75	野首 A	〃	帖字野首	
76	天堤	〃	帖字天堤	
77	片野洞穴	〃	内之倉2634	
78	小淵	〃	帖6423	
79	曲瀬	〃	安楽字中原・西迫・中渡	
80	小瀬	〃	安楽中原4684	
81	宮脇	〃	安楽1106 (字小井手)	
82	安良	〃	安楽外園	
83	川上神社	大崎	持留中持留	
84	大久保	〃	持留大久保	
85	城内	〃	仮宿	
86	二子塚	〃	持留二子塚	
87	下原	〃	持留下原	
88	横内	〃	持留	
89	高尾	〃	菱田	
90	ポンドンガマ	串良	細山田下中	
91	立小野	〃	細山田立小野	
92	大浦サドン迫	内之浦	大浦サドン迫	
93	瀬戸守治 A	高山	後田瀬戸宇治	
94	〃 B	〃	〃	
95	道中原	〃	後田中原4839	
96	片野		川上片野	
97	立元	吾平	上名立元	
98	苦野原 A	〃	上名苦野原	
99	鏡原	〃	上名鏡原	
100	立神	田代	大原立神	
101	大泊貝塚	佐多	馬籠字大久保	

番号	遺 跡 名	市町村	所 在 地	備 考
102	向 町	中 種 子	油久向町	
103	大 園	〃	納官坂元大園	
104	原 尾	〃	坂井原尾国ノ峯	
105	二 十 番	〃	増田二十番西川原	
406	伏 之 前	〃	野間伏之前	
107	阿 高 磯	〃	田島阿高磯太世田	
108	中 田	〃	坂井中田堤	
109	野 大 野	南 種 子	西之	
110	田 尾	〃	島間田尾	
111	長 峰	上 屋 久	小瀬田長峰	
112	一 湊 松 山	〃	一湊松山	
113	城 之 平	〃	湯向城之平	
114	富 田 原	〃	湯向富田原	
115	宮 迫	〃	木村宮迫	
116	新 浦	〃	口永良部西之浦	
117	西 ノ 浜	〃	口永良部西ノ浜	
118	下 新 道	〃	口永良部西ノ浦	
119	中野(黒瀬)	〃	口永良部金ヶ迫	
120	前 田	〃		
121	頼 戸 之 上	〃	永田叶	
122	栗 生	屋 久	栗生	
123	横 峯	〃	横峯春牧	
124	嘉 德	瀬 戸 内	嘉徳	
125	面縄第1貝塚	伊 仙	面縄金久バル	
126	神 野	知 名	大津勘長浜	
127	宇 宿 貝 塚	笠 利	宇宿大龍2300	
128				
129				
130				

鹿兒島県市町村別遺跡地名表(1985年)及び志布志町遺跡地名表は、共に小瀬A遺跡(80)に続いて小瀬B遺跡を掲げてあるが、志布志町の遺跡地名表は、両者の所在地を志布志町安楽中原4684としてあるので、合して小瀬遺跡とした。

鹿児島湾を挟むようにして薩摩半島と相対する大隅半島の場合は、鹿児島湾沿いには5か所の遺跡が知られている。このうち4か所は、海から最も遠いものでも1kmを超えない。また、東側の太平洋岸沿い及び志布志湾沿いに発見されている遺跡で、海岸から2km以内にあるものは14か所前後である。これら以外の遺跡は、海岸から近いもので3km、遠いものは20kmを隔てる三枝第1遺跡<sup>66</sup>・新高松遺跡<sup>67</sup>の如く内陸に所在する例も知られているが、大抵は5～11kmの間に位置している。

次に、両半島を除く県北部に発見されている遺跡は、川内川流域と同川に注ぐ支流域及び鹿児島湾奥に流入する天降川流域に知られているが、この地域の分布状況はこれまでに較べ極めて疎である。

最後に薩南諸島・奄美諸島の状況に眼を向けると、これらの島嶼は各々が位置・規模・地形・地質を異にしているので、本土と同じような取扱いができるのか疑問がないでもない。例えば、東西約7km・南北約2kmの口永良部島のような小島に8か所もの遺跡が知られている一方、市来貝塚の西方洋上約30kmに位置する甌島には市来式土器あるいはこれと同時期の遺物を出土する遺跡は、今日まで発見されていない状況にある。また、本県の南方島嶼に知られている市来式土器出土遺跡は、種子島以外の島では島の内部に立地する例はなく、何れも海浜あるいは海岸近くに位置している。

このような市来式土器出土遺跡を全県の視野に立って分布状況を見た場合、地域によって著しい較差があることは、どうしても否めないと考えるのである。従って、本稿では地域によって異なる分布状況をもとに、遺跡がもつ性格のひとつを把握するため、遺跡の所在地を地形・地質などの自然環境を勘案して試みに次のように括ることにした。

## 1 県本土

- A 地域. 鹿児島湾岸沿の遺跡
- B 地域. 薩摩半島南岸沿及び南西岸沿の遺跡
- C 地域. 薩摩半島西岸砂丘内側の遺跡
- D 地域. 南薩摩中央内陸の遺跡
- E 地域. 志布志湾岸北側の遺跡
- F 地域. 志布志湾岸西側の遺跡
- G 地域. 北大隅内陸山地の遺跡
- H 地域. 南大隅中央内陸の遺跡
- I 地域. 上記以外の県本土

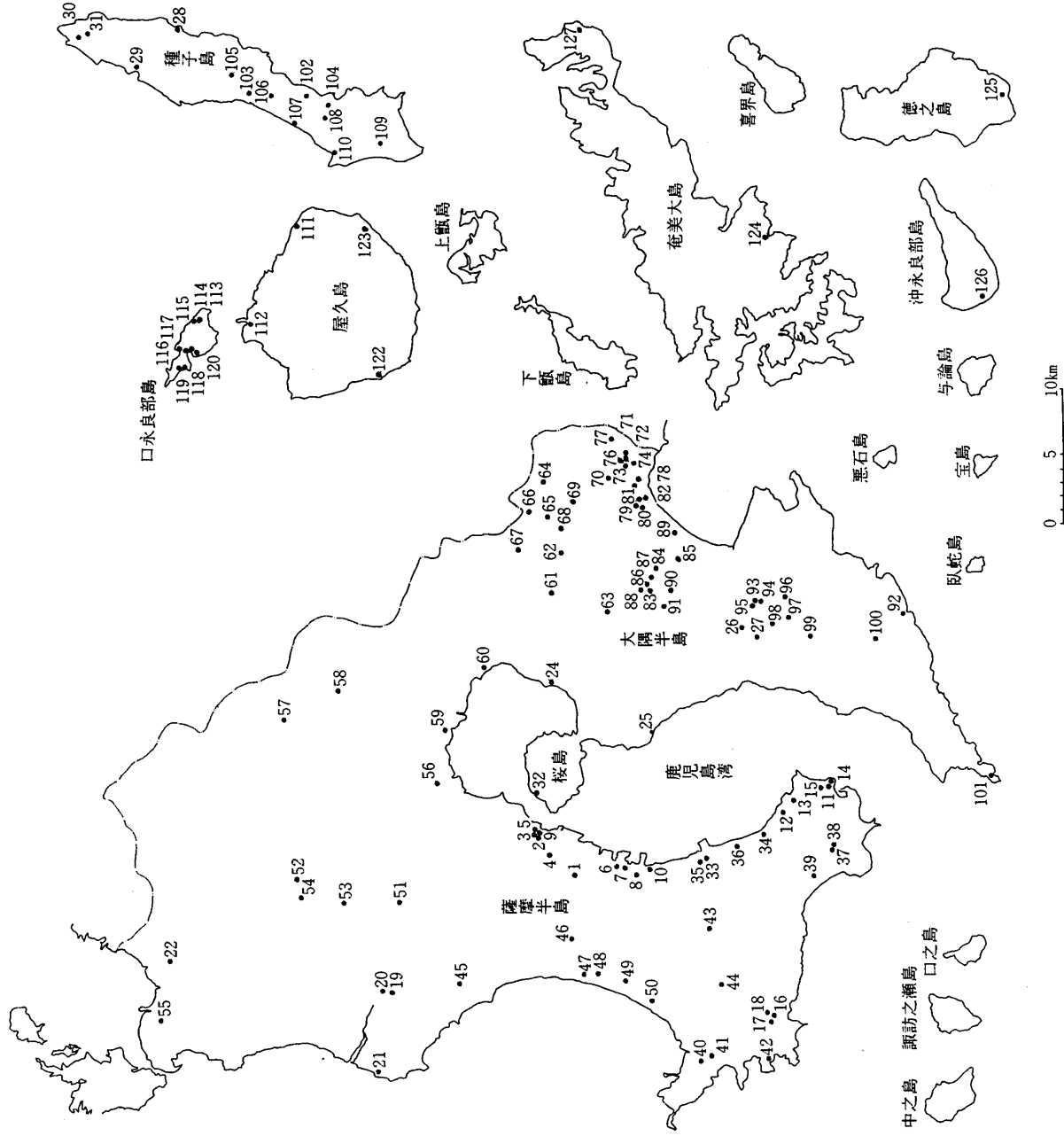
## 2 島嶼

- J 地域. 種子島の遺跡
- K 地域. 口永良部島の遺跡
- L 地域. 他の島の遺跡

## Ⅲ. 市来式土器出土遺跡各地域の地形

上に示した各地域の遺跡がもつ性格の一面を把握するには、その遺跡所在地の自然環境、つまり

図1 鹿児島県の市来式土器遺跡の分布



地形・地質・動植物相を知ることが極めて大切であるだけでなく不可欠のことであると考えられる。しかし、動植物相は域外であるから、本稿では地形・地質について略述する。

## 1. 県本土

### A 地域

A 地域の遺跡は、鹿児島湾口の阿多カルデラ、同湾奥の始良カルデラなどによって形成されている鹿児島湾地溝の周縁に所在する。この地域の基層は、阿多カルデラから噴出した熔結凝灰灰であり、この上に始良カルデラの噴出のシラスが厚く堆積して各地にシラス台地を形成している。この台地の西方には余り高くはないが薩摩半島の脊梁をなす山地が南北に連なっている。山麓と鹿児島湾の間は、広大と云うまではないが割合に低平なシラス台地が広がっている。一方、熔結凝灰灰の上に堆積したシラスは風雨の浸蝕を受易く、海に面した所や鹿児島湾に注ぐ中小河川の両岸は各所に懸崖が見られる。草野貝塚（6）・平川海ノ上遺跡（7）は、こうしたシラス台地の周縁近くに営まれた遺跡と云える。次に西方の山地を源とする各中小河川の下流域には、小規模の沖積地や扇状地が形成されている。木ヶ暮遺跡（4）や大龍遺跡（2）は前者に立地し、橋牟礼川遺跡（15）は後者に営まれたものである。また大渡遺跡（11）・大山崎遺跡（14）は、阿多カルデラから噴出した熔結凝灰灰の上に、池田カルデラ・開聞岳の降下火砕粒が堆積した場所に営まれたものである。

大隅半島の鹿児島湾岸沿に所在する遺跡のうち、始良カルデラの内側に位置する例では、鍋倉洞穴遺跡（56）・春花田遺跡（59）・福山高校遺跡（60）などを指摘できよう。この中の鍋倉洞穴遺跡は始良カルデラ壁の熔結凝灰灰からなる洞穴を利用したものであり、春花田遺跡は始良カルデラ壁の内側にあつて、縄文海進後に形成が進んだ扇状地に立地したものと見られ、また福山高校遺跡は始良カルデラ内の狭小な開地に営まれたものとされよう。今日の鹿児島湾は、これまで述べたように阿多カルデラ、始良カルデラから成る鹿児島湾地溝に海水が流入して出来たものであることを斟酌した上で各遺跡の所在地を一瞥した場合、この地域に発見されている遺跡が海岸近くに位置しているのは、決して故のないことではないと思われるのである。

### B 地域

薩摩半島の南岸から南西岸に至るこの地域は、阿多カルデラから噴出した熔結凝灰灰を基層とし、この上に開聞岳から噴出した降下火砕粒が堆積したところである。海岸線の多くは熔結凝灰灰の浸蝕崖で、ところどころに砂浜が見られるに過ぎない。田中遺跡（37）・仙田遺跡（38）はこうした地形のところどころに営まれたものであり、丸木浜遺跡（42）は、熔結凝灰灰の先端が海に接する傾斜地に所在する遺跡である。また枕崎市花渡川流域は、今日でも河口から約2km遡上した辺りに低湿地が樹枝状に広がっている。この地は縄文海進期は入江であったと見られるところであり、その後の堆積によって潟から低湿地を辿ったに違いないと思われる。この低湿を見下ろす丘陵の標高5～10mの裾には、小江平遺跡（16）・木浦遺跡（18）などの所在が明らかになっている。大浦町に発見されている遺跡は、西方が熔結凝灰灰の先端が海中に落ちるので険しい崖になっているから海への出入は容易でないが、北方は小径を辿って海へ向かうとすれば干拓以前の海岸は2km余りで差程遠くない。



### C 地域

薩摩半島西岸に広がる吹上浜は、南北約30km・最大幅員約2kmの砂浜である。海岸は遠浅で、春夏秋冬汐干狩できる本県最大の砂浜である。砂丘の内側には低いシラス台地と浸蝕された低い丘陵が各地に見られる。また、万之瀬川を始め各中小河川の流域には沖積地が広がり、これらの河川は合して、薩摩半島で最も肥沃な水田地帯を形成している。この砂丘の内側には、南原A遺跡(49)・上焼田貝塚(50)など5遺跡が南北に連なるようにして点在している。これらの遺跡は海岸から1~2kmのところの位置する。

### D 地域

ここで市来式土器の出土が知られている遺跡は、僅か2か所で前のA~C地域に比べ格段に少ないけれども、遺跡の立地に共通するものが考えられるので、項ひとつを置いたものである。この2遺跡の東方は、鹿児島湾に沿って南北に縦走する山地があり、西方と南方は主峰蔵多山から分岐したと見られる山塊、そして北方は薩摩半島の脊梁山地の支脈がある。遺跡は四方を山地に囲繞された盆地状の地形を呈する内陸に所在する。八反田遺跡(43)は最矩の鹿児島湾まで11km余り、南岸までは約12kmである。また山麓近いにある田中堀遺跡(44)は南方へ出ると約11km、逆に北へ転ずれば概ね10kmで海岸に到り両者は甲乙つけがたい所に位置する。先年、著者が田中堀遺跡を踏査した際は、割合に大きい市来式土器の破片を採集できたけれども、一帯の畑地の表面に獣骨・魚介の自然遺物は確認していない。

### E 地域

志布志湾の北岸近くに知られている遺跡の多くは、標高50~60mのシラス台地に所在するが、この一群から多少離れたところにある遺跡は、後背の宮崎県境から南西に延びる各支脈の山裾に位置する。これら一群の遺跡で西方に位置するものは、志布志湾からは1kmを隔てているが、シラス台地の中心近く点在している遺跡は海岸から2~3kmの距離にある。次に同じ群で東端の片野洞穴遺跡(77)は海岸から6km強、また最北の樽野遺跡(70)は6kmの内陸に所在する。この一群の遺跡在地の地理的・地形的特徴は多くの遺跡がシラス台地の概ね中央に群在することであり、今ひとつは山麓あるいは丘陵とシラス台地が接するところに位置することであると考える。

### F 地域

志布志湾西岸のシラス台地に発見されている遺跡を見ると、大隅半島北部から南へ向かって緩傾斜するシラス台地の一隅に所在する。最北の徳光ヶ丘遺跡は標高約220mに位置するが、最も南に位置する城内遺跡は同じシラス台地でも余り高くない所に位置する。また、両遺跡の間にある遺跡の大方は標高70~150m見当である。

次に、これらの遺跡と海岸との距離を見ると、徳光ヶ丘遺跡は最も近い鹿児島湾までは約12kmであるが、鹿児島湾側は始良カルデラの峻険な崖垂になっており、往来するには聊か酷しい。一方、南に転じて志布志湾に向かえば、最短距離が約18kmで小径の草木を掻分けながら往復する1日の行程としては、限界に近いようにも思われる。南端に位置する高尾遺跡(89)は、最も志布志湾に近く、その距離は概ね2kmである。また両者の間に点在する遺跡は、志布志湾までは大方3~10kmの間にある。

## G 地域

大隅半島北部のG地域は前出のE地域の場合に似て、宮崎県境の山地から分岐した支脈の丘陵性高地が卓越したところである。8遺跡で最も高所に位置する高岡口第Ⅱ遺跡(64)は標高約250mであり、最も低い所に位置する新高松遺跡(67)は標高約130mである。他の遺跡は何れも両者の間にあって、大方は標高200m前後である。これらの遺跡は、本県の市来式土器が出土する遺跡の中で最も高所にあることは間違いない。次にG地域の遺跡を海岸までの距離で示せば下表のとおりであって、各遺跡は鹿児島湾・志布志湾の何れからも、10km以下の里程ではない。従って各遺跡から海までの距離は後でも述べるが如く、個別的には各遺跡、延いてはG地域に所在する全体の在り方をも大きく左右する地理的要因として、決して看過できないものと考えるのである。

表2 G地域名遺跡から海岸までの直線距離

遺跡名(番号)	鹿児島湾(km)	志布志湾(km)	備考
向 段(61)	12	21	
八 合 原(62)	19	16	
高岡口第Ⅱ(64)	28	16	
大 路(65)	23	16	
三 枝 第Ⅰ(66)	23	18	
新 高 松(67)	18	22	
垂 門 A(68)	24	15	
堀 之 内(69)	28	12	

## H 地域

H地域はE・F地域同様に高低差が余り大きくない平地であるが、太平洋に接する東側は標高886mの国見山を主峰とする国見山系があり、鹿児島湾に沿う西側は海に沿うようにして高隈山地が延びている。これら二つの山地は南隅に至ると相接するから、遺跡の在地は東西と南の三面が閉ざれ、これまでに取上げた南薩摩内陸のD地域の例に極めて近いと云えなくもない。これらの遺跡から鹿児島湾に最も近いものは、鏡原遺跡(99)の約9km、志布志湾へ出るに最も近いものは、瀬戸宇治A遺跡(93)の約10kmである。しかし、この場合も三方が山地になっているから、海との結びつきは断たれたも同然の状況にあって、前のD地域やG地域と一線で以って区別することは難しいように思われる。

## I 地域

県本土の市来式出土遺跡のうちA～H地域に含めなかった遺跡であるが、これに含まれる遺跡は特定の地域に稠密に分布するものではなく、全く疎である以上に所在地周辺に同時期の遺跡の所在さえ知られない今日である。しかし、これらの遺跡が所在する地形と海岸からの距離は、A～H地域のそれぞれに相通ずる特徴をもっているように思われる。例えば、川内上流域に位置する時吉瀬ノ上遺跡(52)・轟原瀬ノ上遺跡(54)は、共に河川近くの丘陵近くにあるだけでなく、海岸から約20kmを隔てた内陸に所在する。こうした特徴は出水貝塚(22)・江内貝塚(55)など1、2の遺跡を除くH地域の他の遺跡に通ずる事柄と云ってよい。

なお、出水貝塚(22)出土の土器は出水式を主とするが、これは熊本県南福寺貝塚の指標土器の南福寺式と同期の縄文後期に比定されている上に施文も同じような凹線文系に属し、後述する如く

多くの市来式土器出土遺跡に発見例が多い岩崎土器、指宿式土器との脈絡を辿ることの可能性をもっていると考えて本稿に採入れたものである。

## 2. 島嶼

### J. 種子島

種子島で市来式土器の出土が判明している遺跡は14か所であるが、これらの大方は海岸近くあるいは海岸から余り遠くないところに所在する。遺跡立地の自然環境にこのような傾向が認められる中で、大田遺跡(31)・二十番遺跡(105)・中田遺跡(108)は、共に東西兩岸の中間に位置しており、県本土の内陸に所在する遺跡に近似した自然環境の所に位置していると云えなくもない。勿論、東西の最大幅員が12kmにも及ばない種子島にして見れば、遺跡が海岸から4～6kmの内陸に所在すること自体取上げるに及ばないことかとも思うが、注目すべきことはこれらの遺跡が海に近い海岸段丘の先端に所在するのではなくて、種子島の脊梁とも見られる島のほぼ中央部の低い丘陵に発見されていることである。

### K. 口永良部島

口永良部島は東西約7km・最大幅員3km足らずの小島であるが、市来式土器を出土する遺跡が7か所も知られていることには聊か驚かされる。遺跡は島の東側に2か所、西側には実に5か所が知られている。これらの遺跡は東西共に海岸に近い海岸段丘に位置するが、西側の遺跡は南北双方に、入江を控えているところが立地上の特徴であろう。

### L. 他の島嶼

薩南諸島・奄美諸島のうち上記の2島以外で市来式土器が出土している遺跡は、地名表及び分布図のとおりであり、その現況は多いと云うには遠く及ばないものの、これらの遺跡は南の島嶼と九州の南北交渉を研究する上で重要、且つ不可欠の高い地歩を占めているものとする。発見されている遺跡のうちから本稿では次の4か所を選択した。

#### ア. 宇宿貝塚

宇宿貝塚は筈利町東岸のビーチロック上の旧砂丘上に所在する。遺跡の東側には今日の新砂丘があり、二の前方沖合には遠浅のリーフが続いている。遺跡は数次に亘って調査され、奄美諸島と九州の交渉を示す各時代、各時期の遺物が発見されている。就中、市来式土器は奄美諸島を中心に分布する宇宿下層式と同じ層から出土し、縄文後期に奄美が九州と直接か間接かは定かでないけれども繋がりがあったことを示している。

#### イ. 嘉徳遺跡

嘉徳遺跡は瀬戸内町の太平洋に面した入江の奥の砂丘に立地する。この遺跡から出土する指標土器は、嘉徳Ⅰ式・嘉徳Ⅱ式である。特に嘉徳Ⅱ式土器を包蔵する地層から市来式土器が検出され、ここでも奄美南部と九州が交渉していたことを明らかにしている。

#### ウ. 面縄貝塚

面縄貝塚は徳之島の南端近くに所在する第1～第4貝塚からなる遺跡である。遺跡は琉球石灰岩洞穴と、この周りに堆積した砂地に所在する。発見された土器で最も古いものは縄文早期と見られる爪形土器があり、これに次ぐものは縄文前期に比定されている沖縄県室川貝塚発見の室川下層式

土器、九州系の縄式土器及び春日式土器の出土が知られている。縄式土器は室川下層式よりも新しい縄文前期の中頃に、春日式土器は縄式土器より後の縄文前期の終わり近くに比定されるものであろう。次に、縄文中期に想定されているものには面縄前庭式土器がある。また、縄文後期に編年されているものでは、面縄東洞式土器、市来系土器、嘉徳Ⅰ式・Ⅱ式土器などが知られている。従って、面縄貝塚は沖縄・奄美両諸島、奄美諸島間及び奄美諸島と九州の交渉を推知する上で重要な地歩を占める遺跡であることは疑い得ないものと考えられる。

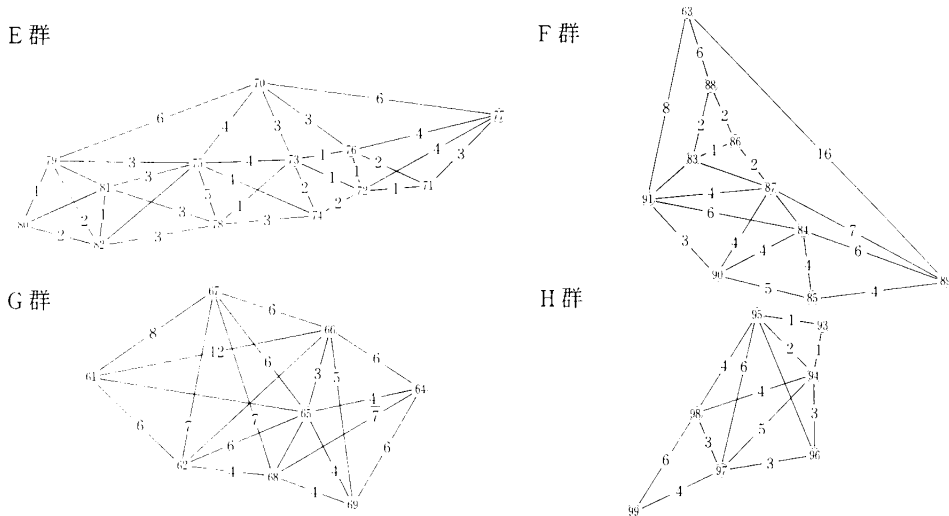
#### エ. 神野遺跡

沖永良部島知名町の長浜に発見されている神野遺跡は、この地域の島々に多く見られる琉球石灰岩の上に営まれたものと思われ、海岸から砂丘を間にして約300mのところの所に所在する。遺跡からは後程に取上げる縄文前期から平安時代に及ぶ各時期の遺物の出土が確認されている。これらの遺物は沖縄・奄美諸島のほか、両諸島と九州一の交渉を知る上で貴重な資料であると了知している。

### Ⅳ 各地域遺跡の相互距離

前項では各地域の市来式土器出土遺跡に相通ずる地形・地質などの特徴を述べたが、ここでは先の分布状況で見た県本土にあって、市来式土器出土遺跡の稠密度が他の地域と較べて一際高い大隅半島のE～H地域遺跡の相互距離について述べる。E～H地域遺跡の相互距離は、図2に示したとおりである。

図2 E～H地域遺跡の相互距離



まず、E地域の市来式土器出土遺跡は東西約12km・南北約5kmの範囲に所在するが、東と北の両端にある2遺跡を除いた稠密度の高い範囲は、前の場合に比べ格段に狭い東西約9km、南北は約2km余りである。各遺跡の間は最大が約6kmで最小は約1kmであり、相互距離の平均は2.8kmである。また、各遺跡は大抵が2～4kmの距離にあって、必ずしも遠くを隔てるのではなくて指呼の間にあると云えなくもない。次にこれらの遺跡の稠密度の高い中央部は、東西の小群と両者の間にある2遺跡を1群とすれば3群になる。

F 地域の10遺跡は、南北約15km・東西約12kmの範囲に所在する。南北の2遺跡は中央部に位置する一群から6～8kmを距ているが、中央部の各遺跡は2～4km離れているので、これだけをF地域とすれば遺跡全体の相互距離の平均は3.9kmになり、E地域の場合に比べ1.4km程長い。しかし、F地域は中央部の5遺跡と外側の5遺跡で構成されるものと想定した。この場合、両者がどのような関係にあるのか推知することは難しいけれども、中央部の遺跡と外側の遺跡は一体的で相互補完的なものとして扱えられるのではあるまいか。

G地域の8遺跡は、東西の径約16km・南北の径約7kmの楕円の範囲に所在する。各遺跡の最短距離は3kmであるが、最長は約11kmあって相当に遠い。しかし、大抵の遺跡は3～6kmを距てる。また地域全体の遺跡相互距離の平均は5.7kmでE地域の2倍強になり、この地域の分布状況が疎であることを如実に物語っている。

H地域に判明している遺跡は7か所である。この7遺跡は、長径約11km・短径約5kmの長楕円内に所在する。各遺跡で距離の遠いものは6～7kmで、近いところにある遺跡は1～2kmの距離であり、遺跡の多くは3～6kmの間合いである。また、この地域の遺跡相互の平均距離は3.8kmでF地域の例に近い。

以上、大隅半島のE～H地域に知られている市来式土器出土遺跡を距離に絞って比較検討したところであるが、G地域以外の3地域は、先に述べた如く広範囲に所在する遺跡を一つの大枠に括ることができると共に、この広い範囲の概ね中央には2～5遺跡で構成する一際稠密度の高い小群が存在する傾向が認められるようである。このことはE地域しかりであり、F地域しかりであり、またH地域しかりである。斯くて、このような小群を中心にした広範囲の遺跡の集まりを一つの単位と見なして、本稿では「群」と仮称する。群は各所在する地域の呼名に因んで、以後はそれぞれE群・F群・H群と称する。

G地域はE・F・H地域とは異なり、中央の小群に相当する遺跡は現在では判明していないけれども、この地域全体の遺跡の分布状況は、先の3地域とは明らかに相異なる。つまり、この地域に見る遺跡の分布状況は、今日においても九州を始め日本の各地に認められる山村の集落形態のそれと同等あるいはこれに極めて近い状況を呈していると見るものである。このことは、先に述べたG地域の地形の特徴と重ね合わせると一段に当を得ているように思うのである。このような見方に立てば、G地域の場合と雖も、先のE・F・H地域の場合と同じように広域を単位にする一群に認めてよいのではなかろうか。

E・F・H群はシラス台地の中央から山地の麓に所在する。今日ではシラス台地に防風の屋敷森に囲まれた散村的集落形態が見られる。また、このシラス台地は保水力に乏しい畑作地帯であるので、今日では作物の輪作体系ができており、毎年の作付はそれに沿って行われている。

## V. 各群の市来式土器出土遺跡に見る縄文中期～晩期の土器

市来式土器が発見される遺跡では、同じ縄文後期に編年されている別の土器や市来式土器より後の縄文晩期の土器が発見されることは決して珍しくない。ここでは先の大隅半島のE～H群についてその状況を述べる。

ア. E群

この群で市来式土器遺跡は13か所であった。このうち同じ縄文後期でも市来式土器に多少先行する指宿式土器が発見されている遺跡は9か所で、この割合は69.2%とかなり高い。そして、この指宿式土器よりも古いとされている岩崎上層式土器、更に岩崎上層式に先んずる岩崎下層式土器は、共に3か所の遺跡で出土が知られているが市来式土器出土遺跡に比べ少ない。次に、市来式土器と併行あるいは市来式土器の後半に時期が重なりと見られる西平式土器や御領式土器の出土遺跡は、岩崎上層・下層式と同程度の頻度である。また縄文晩期の土器は2か所に知られ少ない。

表3 E群の遺跡から出土する縄文中期～晩期の土器

遺跡名(番号)	中 期				後 期				晩 期							
	並	中	門	高	岩崎下	岩崎上	指	宿	市	来	西	平	御	領	黒色研磨Ⅱ	黒色研磨Ⅲ
樽野(70)									○							
堂ノ下(71)							○		○							
家野(72)							○		○							
松崎(73)							○		○							
柳ノ下(74)					○	○	○		○							
野首A(75)									○		○					
大堤(76)	○		○						○				○			
片野洞穴(77)					○	○	○		○		○					
小測(78)					○	○	○		○		○					
小瀬(79)							○		○		○					
小瀬(80)							○		○		○					
宮脇(81)							○		○		○					○
安良(82)									○		○				○	

イ. F群

F群を構成する市来式土器出土遺跡は10か所である。このうち指宿式土器は8か所の遺跡に発見されているが、E群に認められた岩崎上層・下層式土器は、この群では全く発見されていない。次に縄文晩期の土器は2遺跡に知られ、E群と同じような傾向にあるように見られる。

なお徳光ヶ丘遺跡・立小野は、共に草野貝塚指標土器の草野式で市来系である。

表4 F群の遺跡から出土する縄文後晩期の土器

遺跡名(番号)	中 期				後 期				晩 期							
	並	中	門	高	岩崎下	岩崎上	指	宿	市	来	西	平	御	領	黒色研磨Ⅱ	黒色研磨Ⅲ
徳光ヶ丘(63)							○		○(草)							○
川上神社(83)							○		○							
大久保(84)							○		○							
城内(85)							○		○							
二子塚(86)							○		○							
下原(87)							○		○							
横内(88)							○		○							
高尾(89)							○		○							
ボンドンガマ(90)							○		○(草)							
立小野(91)									○		○					

(草)は市来系の草野式である。

ウ. G群

G群は、大隅半島四群の中で海岸から最も遠い高所に所在する。このことは既に述べたとおりである。市来式土器出土遺跡は8か所が知られ、この中の6か所から指宿式土器が発見されている。

次に、岩崎上層式・下層式土器は三枝第1遺跡に知られているが、この遺跡は縄文中期から同後期まで跡絶えることなく続いている。岩川八合原遺跡に知られている岩崎式土器は、岩崎上層式・同下層式の双方を含むのかどうか明らかでない。また、G群では縄文晩期の土器は2遺跡から検出されている。

表5 G群の遺跡から出土する縄文後晩期の土器

遺跡名(番号)	中 期				後 期				晩 期							
	並	中	門	高	岩崎下	岩崎上	指	宿	市	来	西	平	御	鎮	黒色研磨Ⅱ	黒色研磨Ⅲ
向 段(61)																
八 合 原(62)										?						
高丘口第Ⅱ(64)																
大 路(65)																
三枝第Ⅰ(66)																
新高松(67)																
垂 門 A(68)																
堀 之 内(69)																

### エ. H群

南隅中央部の内陸に所在するG群は7遺跡からなるが指宿式土器を欠くものは鏡原遺跡99のみであり、他の遺跡は総て指宿式土器の出土が知られている。また、市来式土器と同じ縄文後期及び晩期土器の出土例はどの遺跡にも知られていない。

表6 H群の遺跡から出土する縄文後晩期の土器

遺跡名(番号)	中 期				後 期				晩 期							
	並	中	門	高	岩崎下	岩崎上	指	宿	市	来	西	平	御	鎮	黒色研磨Ⅱ	黒色研磨Ⅲ
瀬戸宇治A(93)																
〃 (94)																
道 中 原(95)																
片 野(96)																
江 元(97)																
苔野原A(98)																
鏡 原(99)																

市来式土器出土遺跡の多くからは、同じ縄文後期の指宿式土器が発見される場合が多い。この割合はE群69.2%、F群80%、G群85.7%で、全体の頻度は80.15%である。比率が最も低いE群でも群を構成する遺跡のうちの約70%の遺跡に指宿式土器の出土する。また、この群では市来式土器と指宿式土器の二者が出土する9遺跡の中の3遺跡に、指宿式土器に先行する岩崎上層式、更に同系の岩崎下層式土器の出土が判明している。このように岩崎下層式・岩崎上層式、指宿式、市来式のように時期の前後関係が相当に明らかになっている遺跡が余り距離を距てない特定の地域の遺跡に発見されることは、何を物語っているのだろうか。この場合、一群に占める割合が概ね33%の岩崎上層・下層式土器は仮令別にするとしても、市来式土器出土遺跡でE群の約70%を下限にして、各群に指宿式土器が発見される事実は看過出来得ないことであり、両者は極めて緊密な関係にあったに違いないものと考えるのである。このことは各群の遺跡の相互距離を加味して考えた場合、各群の存在に大きく影響すること必定と考えるのである。

市来式土器は本稿でたびたび述べているように縄文後期に編年されており、そのC14年代は3500 B・P・Yが与えられている。近年行われた川上(市来)貝塚発掘調査によると、市来式土器は器

形・文様の特徴をもとに細かく類別することが考えられているけれども、この分類は、これまでの市来式土器の基本的形態の特徴の枠を超えるようなものではないと云われている。このことは市来式土器の編年や同じ縄文後期の他の土器との関係に影響することがないばかりか、これまで本県の各地に発見されている市来式土器に一定の年代上の枠が設けられることを示唆すると云ってよい。また、このことは九州南部と共に、沖縄・奄美両諸島に発見されている市来式を含む市来系土器を共通の年代的物差で考える道を開くことにもなると考える。斯くて、本稿に取上げた市来式土器出土遺跡は、時期の上で多少の年代上の振幅は持つが、C14年3500Y・B・Pに収斂させてよいと云えることになる。従って、先に述べたE～H群の市来式土器出土遺跡は概ね時期を同じくする頃に営まれたことが考えられることになり、既に述べた遺跡相互の空間的距離に加え時間的距離の上からも、これら遺跡のまとまりは群から更に一步先んじて「小集落」、場合によっては「ムラ」を想定しても不都合はないものと推知する。その場合、E群は少なくとも東西二つの集落が推定される。即ち、東端及び北端に位置するそれぞれの遺跡は東側の遺跡の小群からなる単位集落に、また、東西の遺跡小群の中間の2遺跡を一つの集落に仮定すると、E群は三つの単位集落があったことになる。この際も東端及び北端の遺跡は最初の例に準ずることになる。

F・H群はそれぞれ群の中央に発見されている遺跡が群の単位集落を構成し、外側に所在する遺跡は中央の単位集落と結びつきを持つ人々が居住していたと考えられなくもない。各群の中央に所在する遺跡は、氏族共同体の構成員が居住するところであり、外側に発見されている遺跡は中央に位置する小群の何れかの遺跡と血縁関係にあった人々の居住が想定される。

G群は各遺跡の分布状況からすると群の中央に当たるところに遺跡は所在するが、これまで述べたE・F・H群のように群の中心になるような遺跡の小群は認められないので、当G群は各遺跡毎に半独立的な人々が在ったものと推知するものである。つまり、この群は先に述べたように近年まで日本の各地に見られた山村の立地形態に極めて近いと思うのである。また、各遺跡に推定される小集落は2世代あるいは3世代の人々が構成する小規模の血族ではなかったかと想定する。そして、こうした社会の在り方は狩猟などの滞留型の生活を基礎を置く人々には難しく、長期に亘る定住があってこそ始めて成立するものであろうと考える。

## VI. 縄文後期の遺跡及び出土土器の分布から推理する縄文稲作農耕

今日、日本の稲作の始まり、即ち、日本で最初に水稲が栽培されたのは、今から約2400年前の縄文晩期あるいは弥生時代の早期に始まったとする見方が主流である。また稲の伝播経路については、朝鮮半島→九州北部を主にするが、これ以外に幾つかの考え方が提示されているのも事実である。このほか、日本に伝わった初期の稲は水稲であったのか陸稲であったのか、結論を見るに至っていないのが現況のようである。

ところで、市来式土器出土遺跡の分布状況を調べると本県を含む南九州以外では、南方は奄美諸島だけでなく沖縄県の浦添貝塚、伊江島・伊是名島に発見例が知られている。次に、北方では長崎県有喜貝塚遺跡などが発見されていて、市来式土器の分布が広域に及んでいることは夙に早くから云われていることである。沖縄県で「九州系の土器」の呼称がある故は、市来式土器の発見地に因



んでいるのか遺跡の分布の疎密に因るのか詳らかでないが、何れにしても九州南部に遺跡が濃密に分布している市来式土器出土遺跡について、沖縄県熱田原遺跡、鹿児島県沖永良部島の神野遺跡を始めとする奄美諸島の遺跡で出土している市来系土器を資料にして逐次述べる。表6は沖縄・奄美両諸島で発見されている縄文土器のうち、両諸島の相互関係及び九州南部との関わりを理解する上で欠くことが出来ないと思われる土器型式をまとめたものである。今、同表により沖縄・奄美両諸島を一瞥すると、沖縄諸島の縄文早期はヤブチ洞穴発見の指頭押圧爪形文土器、渡具知東原遺跡には篋書沈線文を主にした指頭押圧爪形文土器、渡具知東原遺跡には篋書沈線文を主にした指頭押圧爪形文土器また篋書爪形文に沈線が加わる土器などが出土していて、九州の爪形文土器との脈絡を辿ることが出来ると共に、縄文早期の段階で九州地方では認められない特色をもった土器が出土している。両遺跡出土の土器は、ヤブチ式がC14年代6,670±140Y・P・B、東原式のC14年代6,450±140Y・P・Bである。奄美諸島で縄文早期に比定される遺跡は、爪形文土器が検出されている面縄第1貝塚があるが、最近では縄文創草期あるいは創草期以上に遡上すると思われる。遺跡の所在が推知できる状況にある。<sup>13</sup>

次に、縄文前期では沖縄・奄美両諸島の遺跡から、沖縄県室下貝塚発見の室川下層式土器を指標とする土器が出土し、縄文早期に比べ分布範囲が拡大していることを示している。また、九州西北部に遺跡が主に分布する曾畑式土器は、沖縄県渡具知東原遺跡にも出土している。渡具知東原遺跡発見の曾畑式土器はC14年代4,880±130Y・B・P、条痕文土器は宝島大池遺跡でC14年代4,820±40Y・B・Pで両者の較差は殆んど認め難い。このように九州系の土器が縄文早期に続いて南島で発見されることは注目してよいことに違いないが、同じ九州系の轟式土器及び春日式土器が徳之島に発見されている状況を見ると、格別視しなくて良いように思われる。一方、沖永部神野遺跡の指標土器の一つである神野A式土器・神野B式土器が沖縄で発見され、沖縄・奄美両諸島間の交渉が早期に引続いて行われたことを明らかにしている。

縄文中期の状況は沖縄・奄美両諸島共に、九州各地の遺跡に出土が知られている九州系の土器の例は承知していない今日である。次に沖縄・奄美両諸島の関係では、神野遺跡指標の神野C式土器と面縄第3貝塚指標の面縄前庭式土器が、共に沖縄諸島で確認され縄文早期から同前期まで続いていた交渉が同中期中頃から終りに復活した様相が見られないでもない。

次に、沖縄・奄美両諸島の縄文後期の状況は神野遺跡発見の土器を手掛りにすると、理解が容易であるように思われるので神野遺跡発見の土器と対比しながら表6に拠って述べる。この時期の沖縄諸島では縄文後期の前半はこの地域固有の土器の出土例は乏しく、これまでの状況と較べた時全く空白に近い様相を呈していると云えなくもない。次に、縄文中期に比定される九州系の土器は沖縄諸島には認められなかったけれども、後期前半の終わりに近い頃に出水系土器と市来系土器が移入されていて、以前とは異なる奄美諸島<sup>14</sup>と九州の交渉の展開に一際深い関心が凭れるところである。また、この時期の奄美諸島は、松山式を含む市来系土器が北部から南部に至る広い範囲に所在する宇宿貝塚・嘉徳遺跡・面縄貝塚・神野遺跡などに発見されており、奄美諸島は沖縄諸島と同等あるいは沖縄諸島以上に眼を離すことができない地域であるように思うのである。次に縄文後期後半の沖縄・奄美両諸島は、恰かも歩を共にするが如く、神野D式土器・神野E式土器・伊波式土器



が併せ行われたように思う。

これまで述べた文言には幾つかの問題提起を含んでいる。その第1は九州から海洋を中において沖縄諸島に至る南北約550kmの広い海域にある島嶼で人々によって営まれた諸事象の画期の整合性の問題であり、第2は沖縄・奄美両諸島を中心とする地域交渉及び沖縄・奄美両諸島と九州の南北交渉の在り方の問題である。この二つを念頭に沖縄・奄美両諸島に発見されている各時期の各種の土器を見た場合、第1の問題では早期のヤブチ式土器・東原式土器と九州の爪形文土器は概ね近似した数値を得ているようである。前期の曾畑式土器・条痕文及び条痕文系土器・春日式土器の場合も、前者同様に評価できる数値であると理解している。地域交渉は神野遺跡発見の神野A～E式土器で見ると、縄文前期から後期に至るまで南の沖縄に発見されており、次いで面縄貝塚発見の面縄前庭式、面縄東洞式土器が沖縄諸島に波及し、この時期の人々の行動領域が拡大したことを如実に示しているように思われる。つまり、島嶼間と雖も通常の人間の行動様式と同じように同心円状に拡大する傾向が見られると云うことである。こうしたことを勘案して、先に述べた本県の一部地域に稠密に分布する市来式土器と沖縄・奄美両諸島に発見されている市来式土器は、双方の交渉の上で如何なることに関わりがあったことを示すものであろうか。沖縄・奄美両諸島に発見されている縄文早期から同前期の土器は、両諸島が文化交渉の上で九州と不離不即の関係以上に極めて近い間柄にあったこと、そして沖縄・奄美両諸島に固有の文化が生じ、それが両諸島内に伝播したことを示している。

沖縄・奄美両諸島と九州の交渉は、縄文前期に比定されている土器を資料にする限り縄文早期に引続いて行われたものの、沖縄・奄美両諸島間の交渉は多少停滞した時期があったようである。このことは既に述べたことである。

縄文中期になると沖縄・奄美両諸島と九州との交渉は著しく停滞するが、両諸島間は沖永部・徳之島の主経路によって結ばれていたことは誤りないものと考えられる。

縄文後期前半頃の沖縄・奄美両諸島と九州、就中九州南部との交渉は著しい活況期を迎えたように思われる。このことを端的に示しているのが沖縄諸島の遺跡に発見されている出水式土器と市来式土器の発見であり、奄美諸島各地の遺跡に検出されている市来式土器の存在である。また、奄美諸島内では縄文後期前半に同地域内の交渉が行われたようである。凹線文系の出水式土器や市来式土器を携えて南下した人々が、奄美諸島内の地域間交渉に新たな転機を齎したかどうか明らかでないが、沖縄・奄美両諸島で発見された土器が共に、縄文後期前半に比定されているところを見ると、決して故のないことではなさそうである。

ところで凹線文系の出水式や凹線に貝殻腹縁を用いて施文する市来系土器を携えて南下した人々が求めた一体何であったろうか。これらの人々が南下して求めたこそは、紀元前約300年に日本に伝わり、以後の日本人の生活に深く関わるようになった外ならぬ水稲と同種の「イネ」、就中「オカボ」(野イネ・陸稲)であったに違いないものと推知する。確かに今日の沖縄・奄美両諸島で発見されている遺跡や遺物からは、陸稲は疎か水稲の栽培を確認できる資料は今日まで知られていないが、本稿で考える縄文後期の稲作の筋立は以下のとおりである。一沖縄諸島は縄文中期の中頃になると、焼畑で陸稲が栽培されるようになっていた。この技術と種子は、神野C式土器・面縄前庭

式土器を用いる人々に拠って奄美南部に招来され、次第に奄美諸島に波及した。しかし、徳之島や奄美大島は毒蛇のハブが生息していることがあって焼畑農耕の定着は容易ではなかった。縄文式後期初め頃になると、出水式土器を始め岩崎上層・下層式土器、揖宿式など凹線文系の土器を手にする人々が南下して、南九州に焼畑稲作の端緒が開かれた。焼畑による陸稲栽培は当時の九州南部の社会にそれまでの人々が経験したことのない大変革を齎した。人々は食料生産の利点を見出し、市来式土器を用いた人々は時に新しい技術と種子を求めて南の島々を目指したようである。南島の市来式土器及び市来系土器の発見には、人々の斯くした行動があったものと推知するのである。このことは面縄東洞式土器の文様が市来式土器の手法に通じていること、また宇宿貝塚からは市来系土器と面縄東洞式土器の融合型とみられる土器が出土している事実は、一面では市来式土器を持つ人々が奄美諸島の各地に暫時滞留したこと暗示させるものであり、両者を重会させた時、先に指摘したことは一段に深く理解されることになろう。

焼畑による陸稲栽培が人々の食料獲得の主役になるまでに差程の時間は必要でなかったようである。今から約3500年に推定される市来式土器出土遺跡の分布状況が何物にも増して、このことを雄弁に物語っていると見るのである。この広がり九州西部では熊本県南福寺貝塚を始めとする遺跡、長崎県有喜貝塚を含む遺跡、九州東部は宮崎県下弓田貝塚遺跡などに始まる同県中央部の木花遺跡など10余か所の遺跡の発見は、こうした変革の一端を示しているのではなからうか。また、九州南部で始まった焼畑稲作は、市来土器出土遺跡の分布拡大に伴って各地に広がり、更なる以遠へは市来式土器を伴うことなく拡散浸透したであろう。このことは疑い得ないもの<sup>16</sup>と考える。

陸稲の栽培技術と種子を求めて南下した人々が九州南部の何れの地に在ったのか、分布図は一言も語らないけれども、仮に凹線文系土器を用いた人々であれば、先ず市来式土器出土遺跡の多くに発見指宿式土器の人々か、同じ市来式土器出土遺跡にあって指宿式土器と比べた時、古くに比定されている岩崎式土器の出土例が他の地域に卓越すると共に、これらの出土遺跡が特定の地域に稠密に分布する大隅地域の一部、つまり志布志湾周縁であったのではなかつたらうか。

市来式土器を用いた人々が招来した陸稲は、アワ・シコクビエ・モロコシなどと同じように雑穀としてシラス台地を始め山地の尾根近くの丘陵等で栽培されたに違いない。この陸稲がインデ<sup>17</sup>イカ（籾稲）かジャポニカ（梗稲）の何れであったか知る由もないが、東南アジアから東アジアに至る地形・気候・海流・植生などと共に沖縄・奄美両諸島が占める位置を深く考慮した場合、日本の縄文後期に招来された陸稲は、ジャポニカ（梗稲）のモチ（野モチ）に推定できるのではなからうか。<sup>18</sup>

縄文後期前半の中頃から終り頃に焼畑で陸稲の栽培が始まると人々は、それまで食料を採取・狩猟・漁労等で食料を獲得していた生活から主穀は次第に焼畑で栽培することになり、それまでの過去の日本に居住していた如何なる人々が経験しなかつた新しい事態に対処しなければならなかつたことは云うまでもあるまい。それは先ず焼畑農耕に伴う定住であり、作業の共同化である。このため、人々は居住地に近い決まった場所で、火入れ・播種・管理・収穫など一連の作業をしなければならなかつた。その反面、人々は食料を従前にも増して、容易に、然も安定的に確保できるようになったことは間違いあるまい。縄文中期の遺跡に比べ同後期から晩期の遺跡に飛躍的増加傾向が認められるのは、或る程度の食料の確保が可能になったことと決して無縁ではない筈である。一方、

原初的焼畑農耕<sup>20</sup>と雖も人々の定住化と作業の共同化は、社会の在り方に革命的変革を齎したに違いない。その第1は家族の在り方である。焼畑農耕が始まった頃は血縁で結ばれていた一族が集団（血族集団）<sup>21</sup>を構成して諸作業に当たったと思われるが、血族集団は次第に肥大化し（同族集団である氏族を構成するに至ったに違はなく、これまで云われた原始共同体は、縄文後期以降は氏族共同体に移行したのではなかったかと推知する。大隅半島に見られる市来式土器出土遺跡が稠密に分布するE～H群は狩猟・漁労・採集の自然経済から一歩進んだ原始的稲作農耕社会における集団形成の搖籃期にあったことを示すものではなからうか。従って、市来式土器を用いた人々は当初に指摘した事柄とは異なり、焼畑農耕によって主穀を得ていたものが大勢を占めていたと見るのである。

なお、これまで日本では縄文中期になると、アワ・ヒエ・モロコシなどの雑穀が行われていたとする縄文農耕の考え方が提唱されたが<sup>23</sup>、それは何処までも陸稲は含まないものと理解している。

しかし、この場合も先に述べた沖縄・奄美両諸島の先方に中国南部や雲南地方を視野に入れると、中国大陸から沖縄・奄美両諸島を経て九州南部、更に西南日本に及ぶ照葉樹林帯の上に人々が拓いた一本のより大きな南北交渉の経路を見ることになって、縄文中期農耕に今まで以上に合理的筋道を見出すことになるばかりでなく、今日湿帯地方から熱帯地方で栽培していたと考えられている縄文前期の栽培植物の遺体発見<sup>24</sup>に関わる経路を考える場合にも捨て難い経路たり得ることは疑いなくであろう。そして、この経路のうち沖縄・奄美両諸島間は、縄文前期は室川下層式土器、次いで神野A式・B式土器に関係した人々であり、奄美諸島と九州南部は、轟式土器・春日式土器を用いた人々の介在が見込まれる。沖縄・奄美両諸島から九州南部を結ぶ島伝いの経路は南北交渉を担った人々が、この込まれよう。従って、主役を担うことになって九州南部は縄文後期の稲作以前の各期の栽培植物の栽培に深く関わることになりこれまでの縄文農耕の考え方に一段幅広い選択肢を与えることは間違いないものと考ええる。ただ、本稿は先程述べたとおり、縄文後期に九州南部でオカボが焼畑で雑穀のひとつとして栽培されたことの可能性と、この筋立を述べることを主旨としたから稿了する。

## Ⅶ おわりに

これまで本県の市来式土器出土遺跡の分布状況に見る特徴、各遺跡所在地通有の地形・地質などの自然環境、各地域のうちE～H地域各遺跡の相互距離及び出土土器から見た遺跡の外見的所見、南島に発見されている市来式土器及び在地土器等について述べて来た。その結果、遺跡の分布状況のみだけでも市来式土器を用いた人々は海を舞台に生活していた、つまり市来式土器の人々は漁労を主とする漁労民族あるいは海洋民族などと、これまで暗々に間々語られて来た考え方を妥当としない全く逆の見方をすべきであることが判った。その上、本稿で述べた分布状況以外の事柄を加えると、縄文後期中頃の市来式土器を用いていた人々は、オカボを雑穀として焼畑で栽培していたとする帰納的推論を得るに至った現在、従前の見方が成立たないものであることを一入強く思うのである。

本稿で用いた資料は、遺跡地名表の一部を除き、総て今日までの発掘調査に基づくものであるけれども十分に生かすことができなかつたと思う。本稿の論旨が証される日は目前に迫っていると確

信する。

- 註(1) 市来町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)「川上(市来)貝塚」市来町教育委員会 1991
- (2) 本田道輝「西之表市納曾遺跡出土土器」鹿児島考古 第12号 1978
- (3) 笠利町文化財調査報告書「宇宿貝塚」笠利町教育委員会。
- (4) 「嘉徳遺跡」瀬戸内町教育委員会, 河口貞徳「嘉徳遺跡」鹿児島考古 第10号 1974。
- (5) 伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書「面縄貝塚群」伊仙町教育委員 1985。
- (6) 高宮広衛「沖永良部島神野貝塚の土器」沖縄縄文土器研究序説所収 第一書房 1993
- (7) 鹿児島県立埋蔵文化財調査センター 新東晃一氏の御教示による。
- (8) 下原遺跡「鹿児島県埋蔵文化財の知識」所収 鹿児島県教育委員会。  
末吉町埋蔵文化財調査報告書(4)「上中段遺跡」末吉町教育委員会 1986
- (9) 沖縄県の考古資料(土器)目録(写真番号 VI-9)沖縄県立博物館 昭59
- (10) 伊江島・伊是名島については那覇市企画部文化局文化振興課市民劇場係の仲地 洋氏の教示による
- (11) 前出(5)の126ページ, 出典は岸本他「野国」野国貝塚群B地点発掘調査報告書 沖縄県教育委員会 1984。
- (12) 笠利町文化財調査報告書(2号)「笠利町高又遺跡」笠利町教育委員会 1978
- (13) 「喜子川遺跡」笠利町歴史民族資料館の中山清美氏によれば, 始良カルデラ噴出のAT層の下の層で礫群が検出された。C<sup>14</sup>年代は25000Y・B・Pが出ていると。
- (14) 上屋久町埋蔵文化財発掘調査報告書「一湊松山遺跡」上屋久町教育委員会 1981
- (15) 沖縄県濡原遺跡に畑地に推定される遺構が発見された旨報ぜられたが, 資料の増加が望まれるところである。また水稲栽培を示す遺構や遺物が発見されたことは承知していない。
- (16) 岡山県南溝手遺跡出土の縄文後期中頃の土器片からイネのプラントオパールが検出された旨報ぜられている。
- (17) 渡辺忠世「稲の道」日本放送出版協会 昭53年。  
佐原真「米について何がわかったか」田中琢・佐原真「考古学の散歩道」所収 岩波書店 1993。
- (18) 中尾佐助「栽培植物と農耕の起源」19, 佐々木高明「照葉樹林文化の道」へHKブックス 昭57, 上山春平編「照葉樹林文化」中央公論社 昭53, 上山春平・佐々木高明:中尾佐助編「続照葉樹林文化」中央公論社 昭53, 佐々木高明「東アジアの基層文化と日本」佐々木高明・大林太良編「日本文化の源流所収」小学館 1991。
- (19) 前出(16)と同じ。前出の佐々木高明「東アジアの基層文化と日本」(以下略)。
- (20) 1木の掘棒を使って土地を掘り, そこに作物の種子を播く極めて原初的農耕の謂。
- (21) 知島誠一「農耕・牧畜の発生以前の原始社会」古代史講座 学生社, エンゲルス「家族・私有財産及び国家の起源」岩波文庫, 佐原真「家族・村びと・結婚」大系日本の歴史 小学館 1987。遠藤元男編「古代史辞典」朝倉書店 昭49。

- (22) 前出(20)に同じ。
- (23) 藤守栄一「縄文農耕」 学生社 昭45
- (24) 福井県教育委員会「島浜貝塚」福井県立若狭歴史民俗資料館 1985。